

令和元年度第2回秋田県立博物館協議会議（要旨）

I 日 時 令和2年2月14日（金）10:00～12:00

II 場 所 秋田県立博物館 大会議室

III 出席者（17名）

委 員	荒川委員、大友委員、後藤委員、佐藤（和）委員、菅原委員、 西村委員、星崎委員、松橋委員、森下委員、
生涯学習課	小野寺学芸主事
事務局	高橋館長、柿崎副館長、梅津展示・資料班長、藤原普及・広報班長、 池端学習振興班長、桑原総務班長、清水副主幹

IV 議事概要

1 開会

2 館長あいさつ

3 会長あいさつ

4 案件

（1）報告

令和元年度博物館事業経過及び令和2年度事業計画（案）について

（2）協議

令和2年度からの5カ年の中期ビジョンについて

（3）その他について

5 閉会

<報告案件に関する質疑応答>

(委員) 学校団体のセカンドスクール利用の人数が減っている。子どもの数が減っているからだと思うが、どの程度減だと自然減によるものだと認識できるのか。

(事務局) 県が集計している学校統計一覧によると、前年度比で小学校は4校、中学校は1校しか減になっていない。児童生徒数は、小学生1,291名減、中学生395名減となっている。利用者数の減が児童生徒数の減と比例している訳ではないようなので、原因を調べているところである。

学校現場から漏れ聞いたところでは、今年度のゴールデンウィークは10連休だったため、例年であればその間に遠足など行事を入れているところ、それが実施できなかったとのことである。

10日間休みだったことにより、授業時数の確保が大変だったようだ。小学校では、英語、プログラミングの授業が必修となるなど、遠足や施設見学に時数を割り振る余裕がなく、新学習指導要領によるカリキュラムで現場が苦しいとも聞いている。

(委員) 博物館ボランティアの中にアイリスの会があるが、どのような活動でどのくらい方が参加しているのか。

(事務局) 博物館にはボランティア組織として友の会とアイリスの会がある。会員数は友の会が158名、アイリスの会が45名となっている。アイリスの会は5チームに分かれ、それぞれ活動を行っている。「お話チーム」は、講演会の受付やわくわくたんけん室で月1回お話会を行っている。「織りチーム」は、わくわくたんけん室での機織り体験を行っている。「図書チーム」は、会員通信の作成や図書類の整理をしている。「藁チーム」は、学校の体験活動、博物館教室の支援を、「藍チーム」は、学校利用の支援を行っている。そのほかにもイベントの協力や、わくわくたんけん室の支援を行っている。

(委員) 友の会は会費徴収があるか、あるとすればそれはいくらか。

(事務局) 1,500円である。

(委員) アイリスの会の会員は、どのような方たちか。

(事務局) 年齢層は、比較的高く男女比は女性の方が多い。

(委員) 博物館実習とあるが、どんな大学が利用しているか。

(事務局) 大学での単位取得に必要なため、大学からの依頼を受けて学生の受け入

れを行っている。遠方の大学からの参加もある。

(委員) 学習振興班の事業にはさまざまな体験活動があるが、児童会館での催しには、小さい子ども連れのお母さんの参加が多くなっている。そういった傾向は博物館でもあるか。

(委員) 当館も児童会館と同様の傾向が見られる。安全対策から、4年生から上の学年は、自分一人で工作することができるが、幼稚園、乳児の場合は、保護者がメインとして作業するようお願いしている。

(委員) 寄贈品に関して、その価値判断や受け入れ方法を聞きたい。

(事務局) 原則的には、部門の担当者が受け入れを判断し、その後月1回開催される資料評価委員会で館長の決裁を受け、受け入れが正式決定される。このように部門担当者の当初の判断によるところが大きく、担当者段階で断れば委員会には上がっていかないことになる。

しかしながら、評価委員会において受け入れできないと決定する場合や受け入れに条件を付ける場合、複数資料の一部だけを受け入れ、ほかは返却するなどの場合もある。

(委員) 実際の寄付受入数は、寄付の申し出数とほぼ同数となっているのか。

(事務局) 部門によって違うが、お断りしたケースもかなりある。寄付は歴史部門と民俗部門が多い。昨年夏に東京オリンピックの展示を行った。その展示を見た方の中で、同様の物が家にもあると持って来られる方が複数いらっしゃったが、それらをすべて受け入れると大変なことになる。具体的には観覧券の類が多く、当時の記念切手などはかなりの割合でお断りさせていただいた。

ほかの例としては、天神人形の展示を行うと人形を持って来る方が多い。しかしながら、人形であれば、いつの時代か、いつ購入した物か、誰から買った物かなど来歴がはっきりしているかが受け入れの判断基準となる。

既に同じ物が多数収蔵している場合はお断りするなど、各部門でそれぞれ受入基準を設け、資料価値判断した上で受け入れるべきかの判断をしている。

(委員) 出張わくわくたんけん室は地元の小学校にも来てもらえるのか。学校行事で雨天決行ができるものを毎年実施している。

(事務局) 秋田市の小学校に畳染めのキットをお貸しして、畳染めを行っていただいたことはある。また、石川理紀之助について全校生徒の前で説明したこ

ともある。

暈染めは水に浸けて取り出して乾かす工程があり、工作の中でも時間がかかる方で1時間くらい必要である。人数的には40名が限度である。

実際の様子を館内でご覧いただいたうえで、学校で実施できるかどうか担当に確認していただければと思う。

(委員) 県南なので、ふるさと村、農業科学館などのイベント情報は入ってくるが、博物館の情報は入ってこない。今日見たり聞いたりして興味が湧いたので、ぜひ県南でも活動していただきたい。

(事務局) 県南では、仙北市教育委員会からの依頼で貝の標本づくりを対応したことがある。

(委員) 館外講座が、昨年より減った理由を教えてください。

(事務局) 県庁出前講座は、全庁上げて職員が現地に出向いて講座を行う事業であり、その事業の中に博物館がエントリーしている。出張講座はそれとは別に講演等の依頼があった場合に対応している。連携講座は、県立大学の授業の一環として大学に出向いて授業を行うものである。そのほかには生涯学習センターと連携した研究報告会を実施している。

減の理由としては、昨年度出張講座で依頼を多く受けていた職員が異動したことによることが大きいと考える。

<協議案件に関する質疑応答>

(委員) 現行ビジョンとフォーマットが変わらずマイナーチェンジというイメージだ。国際的なグループのビジョンに関わったことがある。そういう団体は、ビジョン、ミッション、ストラテジックプランの3段階構えになっている。ストラテジックプランは、日本語で行動計画、つまり展望があって行動があり、その展望を実現するために自分たちがどんな任務を持っているかを考える。

今回の中期ビジョンを見ると、発信します、目指します、行います、取り組みますなど行動計画だけのように思える。県民目線というか、世の中が将来こうなるというところを入れ込こんだほうがいい。その中で博物館は、こんなことをして行くというのを作ると格好がつくのではないか。冒頭部分に、将来の秋田県や博物館を入れてはいかがか。

博物館目線だけではなく、県民目線の表現がどこかにあったほうがよい

のではないか。

(委員) 事前にインスタグラムを調べてみたが、博物館のものはなく来館者からの投稿だけだった。もっと博物館側から情報発信するためにインスタグラムを始めてはどうか。

インスタグラムで、博物館では何が利用できるのかを世界中で見れるようにすれば、オリンピックの観戦などで海外から来た方々が秋田の博物館に行ってみようと思ってくれるのではないか。

秋田県立博物館で何をやっているかの情報がすぐに手に入れられる状況になれば、外国の方や県南の方も来館する可能性が高くなると思う。

(事務局) 前回の協議会では、フェイスブックのフォロワー数が少ないとご指摘を受けた。今は、ホームページとフェイスブックだけであるが、ツイッターやインスタグラムとかのSNSも必要だと感じている。

今のご意見を新たな項目として設けるかどうか検討していきたい。

(委員) 擁護するようだが、博物館のフェイスブックは県施設の中ではかなり充実している方である。

(委員) 収蔵庫の課題についてだが、次期ビジョンの期間において既存施設の中で対応できるものか。それとも予算的なもので検討していくのか。現在、具体的な方向性はあるか。

(事務局) 私どもが理想とする環境と、それを整備する方法等の案の検討を重ねているところである。

現状は収蔵点数が多く、展示や別の何かの方法を通して公開することが望ましい資料と、基礎研究の資料が混在している。それら資料の性格を部門ごとに見極め、どれを残していくべきなのか、公開していくべきものなのかの議論が必要であり、新しい施設が必要なのかの議論はもうちょっと先である。理想があって、それに向かって整備する案を館内で準備することは必要であるが、それと並行するべき作業があると思う。

(委員) それは次期ビジョンの5年の間に行うのか。

(事務局) そういうことになる。こちら側の案を県の中で相談していく期間だと考えている。

(委員) 調査研究の部分で、現在の8部門で総合博物館を目指していくべきだと思うが、近年ベテラン職員が定年退職を迎え、今後マンパワーが不足するのではと危惧している。8部門を再編などで充実させる考えはあるか。

(事務局) 開館当時は6部門であった。先覚部門と真澄部門は、平成8年度に秋田の先覚記念室と菅江真澄センターができた段階でその資料を管理する必要があり部門化した経緯がある。

博物館で扱う部門のカテゴリーは本来は6部門なのだと思うが、運営していく上での実態として、真澄に関わる資料は多岐に渡るため、歴史部門や民俗部門に入ったり、生物部門に入ったりすると一元管理が難しいので現在のスタイルを取っている。それで何か著しい問題があるかということ現状ではないので、今後も継続していきたい。

この先、今までどおりの分類で適合しない資料も出てくる可能性はある。物以外の資料が重要になってくる時代が先々あると思われる中、例えば、デジタル資料、古い写真資料などは、どういった部門になるのか、各部門に任せるのか一元管理になるのかなど、近い将来問題になってくる。現状では、当面今の方向で行うこととなるが、今後色々なことへ対応する必要性があると考えている。

(委員) ベテラン職員の方が定年退職でさみしい気持ちになるが、その方々の知識と経験を今後も生かすという意味で、嘱託制度などないだろうか。知識がもったいない。

(事務局) 以前はOB職員と交流する機会を設けていたようである。今後同様な機会を設けて行ければと考えている。県の制度には定年退職を迎えた職員に対する再任用職員制度があり、昨年度退職した職員がそれを利用して今年度勤務している。また以前には、退職後に非常勤職員として勤務した職員もいる。今年度末で定年退職を迎える職員には来年度の博物館教室を手伝っていただく予定としている。

(委員) 外国語対応について、外国語ができる解説員が必要になると思うが、どのような展望をしているのか。

(事務局) 現在の解説職員の中で英語ができる職員が対応している。また、展示室に英語・中国語・ハングル3種類で解説できるマニュアルを整備している。展示室ではマニュアル持ったまま案内はできないので、コンパクトに携帯できるものの準備をしている。一方で外国からの来館者がパネルをスマホにかざして自動翻訳して見ている光景を時折見かけるし、一般的な翻訳機器も市販されている。そういったデバイスも利用するとともに職員のスキルを高めていく準備をしたいと思っている。

(委員) 外国語のデバイスを希望者へ貸し出しできるのか。

(事務局) すぐには言えないが対応できるようにして行きたい。昔であれば多国

語ができる人でなければ外国の方への対応はできなかったが、今はそういったデバイスの利用も考えていきたい。

(委員) 展示の解説文や名称などをスマホで翻訳しやすいようにするのが大事ではないか。

(事務局) ご指摘のとおりで、翻訳する時はベースになっている日本語がいかにかしかりしているかが大切であり、現在の展示が翻訳しやすいか考えなくてはいけないと思う。センテンスが長いものは翻訳が大変であるし、自動翻訳機などでも難儀するのではないかと思うので、その辺を含めて考えていくべきことである。